#### 國學院大學学術情報リポジトリ

公開講演(要旨)これからの大学のあり方と課題: 大学の過去と現在、そして、未来を展望する(平成二十一年度國學院大學人間開発学会第一回大会 國學院大學人間開発学会設立記念公開講演会・シンポジウム人間開発学研究の胎動--大学の行方を見据えて)

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 天野, 郁夫
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001170

#### [公開講演(要旨)]

## 『これからの大学のあり方と課題』

# ―大学の過去と現在、そして、未来を展望する-

#### 天 野 郁 夫

#### なぜ大学「教育」なのか

私の持っている考え方です。

ウ、日本の大学にとって最大の問題は「教育」の問題に取り組んでこなかったのではないか、というのが、今の関だから「教育」を重要視して来たのではないか、といわれる関だから「教育」を重要視して来たのではないか、といわれる関だから「教育」を重要視して来たのではないか、といわれる関だと思います。そんなことを言うと、大学は昔から教育機

したいと思っています。なければいけない。それは一体なぜなのか、という話をここで今こそ、日本の大学は「教育」の問題に真正面から取り組ま

ます。昨年(平成二十年)の末にこの答申が出ました。中央教その答申は「学士課程教育の構築に向けて」という答申でありから出ました答申が、手掛かりになるのではないかと思います。この問題を考える場合に、最近中央教育審議会の大学分科会

て、いろいろな意味で大学の先生方に読んでいただきたい答申その中身については賛否ありうると思うのですが、賛否を超え題提起した答申はこれが初めて、と言っていいかと思います。育審議会、大学審議会が別に置かれていた時代もありましたが、

れてきたのか。
なぜ今頃になって「教育」の問題が大きくクローズアップさ

の一つになっているわけです。

とをトロウは言っております。とをトロウは言っております。 ユニバーサル化」したということです。ユニバーサル化」したということです。ユニバーサル化というのは、アサル化」したということです。ユニバーサル化というのは、アサル化」したということです。ユニバーサル化というのは、アサル化」したということです。ユニバーサル化というのは、ア

ということであります。 というのは「接近する」という意味ですから、つまり進学の機 等教育は、「ユニバーサル・アクセス」状態になる。 くて、「アクセスがユニバーサル化する」ということが起こる 会が誰にでも開けるようになるという意味です。「ユニバ 齢人口比でみた進学率が五○%を超えるようになりますと、 ユニバー かもしれません。 いますと、「高等普通教育」になりつつある、と言っても 員就学」ですから、 ル・アテンダンス」ではない。アテンダンスというのは、「全 サルというのは、 義務教育のようなものですが、そうではな 今や大学の教育は、そういう意味でい 「普遍的」という意味ですが、 アクセ ーサ 同 ス

す。 場してきたわけです。どうやら大学生の教育だけではなく、そ 続けにお出しになりました。その頃から大学生の学力問題が登 都大学の経済学部の先生 りまして、大学生の学力問題というものは、まともに議論され 問 問 からこの問題に取り組まなければいけないか、と思い始めたの 0 大学生』とか、『小数ができない大学生』とかいう本を、立て ることはありませんでした。ところが、九〇年代の末頃に、 下にある中等教育も大きく変わっている、それが分数や小数 題というのは、 『題として出現したのは、「学力問題」です。これまで学力の このユニバーサル化が進行し始めた時に、もっとも具体的 「来ない大学生になって、大学の教育にも影響しているとい たい九〇年代の後半になる頃からではないかと思いま 初めて大学の先生が気付いたということで、 小中学校、 (西村和雄ら) せいぜい高等学校までの が、『分数ができな 問題であ 真正 京 面 な

#### マス化の進展と学生の意識変化

=

けて、 り「マス化」が急進展したということです。 ですから、殆ど変わらなかったのですが、五年後の七○年には すと、一九六○年代にはまだ一○%代でした。 率の急上昇が起きるわけです。 八%になり、 それ以外 非常に大きな変化が起こります。ご承知のように、 前 の高等教育ですが、 七五年には三三%にまで急上昇しました。 進学率は、 九六〇年代から七〇年代にか 十八歳人口比で見ま 六五年も一一% つま

よって、大きな変化が生じました。 大学生についていえば、この時期にその数が急増したことに観のズレがあります。それはいつの時代でもあることですが、ですから、当然、古い世代に属する教員との間に、意識や価値意識が変化を致します。学生たちは、時代の先端を生きる世代マス化が進展しますと、何がまず変わるかというと、学生の

うやくおさまった頃です。
打ち出した答申が出されました。六〇年末からの大学紛争がよ答申」と呼ばれている、大掛かりな教育システムの改革構想を一九七一年に「四六答申」、昭和四十六年に出ましたので「四六のかというと、そうではありません。中央教育審議会から、こうしたマス化の進展に、政府の側は全然対応しなかった

とで四年制と二年制に統一されてきたのを、これからはいくついました。戦後の学制改革で、大学はすべて同じ設置基準のもてしまおうという、「種別化構想」と呼ばれる提言も含まれてろ言われていまして、例えば、大学をさまざまなタイプに分けこの答申には、今から見ますとラディカルなことが、いろい

だったのではないかと思います。
そのために大学関係者の強い批判と反対を招くのですが、しるアメリカの大学により近いシステムに、日本の大学を変えてるアメリカの大学により近いシステムに、日本の大学を変えていこうという構想が強く打ち出されている点です。言いかえれいこうという構想が強く打ち出されている点です。言いかえれいこうという情想が強く打ち出されている点です。

日本経済が好調だったおかげで、完全な売り手市場になりました。学生の授業離れも言われておりました。就職の方も、でス化された意識の変わった学生たちが入ってくるという、ギャップは、ますます大きくなっていったわけです。ボャップは、ますます大きくなっていったわけです。ボャップは、ますます大きくなっていったわけです。できます。学生の授業離れも言われておりました。就職の方も、てきます。学生の授業離れも言われておりました。就職の方も、てきます。学生の授業離れも言われておりました。就職の方も、大学には、授業よりもクラブ・サークル活動に熱心になる時代がやってきます。学生の授業離れも言われておりました。就職の方も、大学には、授業よりもの大方は、エリート的な大学の出身であり、大学について伝統的な考え方は、エリート的な大学の出身であり、大学について伝統的な方法の表情にありました。

学生たちはあくせく勉強しなくても、

就職口はいくら

細かい規定があったわけで、

それが大学の柔軟な対応を妨げて

たということになるわけです。化」現象が言われたのもこの頃です。それだけ教育改革が遅れ外の活動の方にますます力を入れるようになり、「教育の空洞でもある、という時代でした。学生たちは、教育よりはそれ以

### 一九九〇年代・「教育」改革の始まり

Ξ

とになって参りました。になり、大学教育のあり方を改革しなければいけないというこ方であるということが、だんだん関係者の間で認識されるよう力○年代になると、このままでは大学の教育の質が下がる一

課程二年、 それまで設置基準で雁字搦めに縛られていました。 とづいて、八七年に大学審議会が設置されるわけです。 題、 必修だとか、 基準の大綱化を図ったわけです。 ました「大学教育の改善について」という答申でありました。 続いたこの臨教審は、 由化・大綱化したのかというと、 の一つに、大学審議会という組織を設置して、そこで大学の問 をご存じの方も多いと思いますが、一九八四年から八七年まで この答申は、 その大学審議会の一つの大きな目玉が、一九九一年に出され 中曽根内閣による「臨時教育審議会」というものがあ 改革の問題を審議するという提言がありました。それにも 専門教育の課程二年、 人文・社会・自然の三系列に亙って何単位とか 大学の自由化・大綱化と呼ばれました。 いろいろな答申をだしましたが、 日本の大学教育の 「大学設置基準」です。 般教育の課程では外国語 あり方は、 般教育 その中 何を自 0 設置 たの

うことになりました。て、まず一般教育と専門教育の縛りを、全部止めてしまうとい弾力的にしようという改革だったわけです。その手掛かりとしいる。この際自由化し大綱化して、学部段階の教育の組み方を

すか、 D ていいかもしれません。 道具」、あるいは学生を学習熱心にするための「小道具」と言 るわけです。 学教育を成り立たせるために必要な、さまざまな装置とい 大きな改革がありました。アメリカで生まれた、マス段階の大 ろいろな「小道具」の導入がはかられるようになりました。「F メスター制」、「オフィス・アワー」、「GPA」であるとか、 この時に、そうした弾力化、 「小道具」を導入すべきだということを答申は書い 「授業評価」というのも出てくる。 それは、 教員を教育熱心にさせるさまざまな「小 例えば「シラバス」であるとか、 自由化だけでなくて、もう一つ てい いま ーセ

わけです。ですが、それを日本の大学でも導入しようということになったですが、それを日本の大学でも導入しようということになったれはアメリカではごく日常的に、大学教育で使われているものこうしたものが、九一年の答申には書き込まれています。こ

員会方式」という形で、それぞれの専門学部から先生方が出 ばれるようになり、 数年の間に全部姿を消しました。先生方は専門学部にそれぞれ 教育課程があっという間に解体されて、国立大学の 本柱で進んできた。 したかは、これも先刻ご承知の先生が多いと思いますが ですから、 般教育の部分は、 設置基準の弾力化と教育の それでは、 この部分に「全学出動 この設置基準の弾力化が何を齎 教養教育とか全学共通教育と呼 `「小道」 体制」とか 具 導入の、 教養部は、 般

行くという形になりました。

とになりました。 になったわけです。その結果、一 離が行われたといっても良いのかもしれません。 局が無くなったということで、 なったわけですから、 減って行く。 面的に支配する形になってきました。 今になって見ますと、どんどん削減されて、 般教育に関する限り、教育と研究の組織 専門教育が、 教養教育にせよ共通教育にせよ、 日本の大学の四年間の学部教育を全 専門教育が下まで降りてくるこ 般教育と共通教育の 教養部という組織が無く 単位数も時間数も の分化、 そういうこと 組織 部分が、 責任部 の分

貧弱になるという変化が起こったわけです。
で、一般教育と呼ばれていた部分、教養教育の部分はどんどんで、一般教育と呼ばれていた部分、教養教育の部分はどんどん大学も出て来ていますが、専門教育が下に降りてくるという形ですが、実は全くできなかった。最近になって教養学部を創るような組織ができるんじゃないかという期待も強くあったようような組織ができるんじゃないかという期待も強くあったようような組織ができるんじゃないかという期待も強くあったよう

形ばかりということが多いのはご承知の通りです。 教育のさまざまな「小道具」も、確かに導入されましたが、

## 二〇〇〇年前後・研究重視への回帰

匹

企業にはもう余力は無いので、大学で基礎研究、応用研究をやっ不況が長引く中で、これからは先端科学技術競争が重要だが、きな振れが起こります。バブル崩壊で日本経済が低迷を続け、後の時期になりますと、また、大学の研究重視の方向への、大

てほしいという話しになってきました。

にお金を廻すという仕組みができあがってきました。 教育を支える基盤的な部分よりは競争的な部分、先端的な部分に変化することになりました。国立も私立も似たような構造で変化することになりました。国立も私立も似たような構造にお金を廻すという仕組みができあがってきました。

一方、大学の方もさまざまな問題を抱えていました。一つ 一方、大学の方もさまざまな問題を抱えていました。一つ を済が起こるようになりました。 の前倒し化が、どんどん進行をするようになりま した。学生たちは、一方では就活に時間を取られる、他方では、 となってきました。学生たちは、一方では就活に時間を取られる、他方では、 になってきました。学生たちの時間がどんどん削られていく状態 になってきました。学生たちにとって、授業にでるだけでなく、 キャンパスにいる時間が重要ですが、そのキャンパスにいる時間がどんどん短くなっていくという変化、「教育の空洞化」現 の前倒し化が、どんどん進行をするようになりま した。学生たちにとって、授業にでるだけでなく、 キャンパスにいる時間が重要ですが、そのキャンパスにいる時間がどんどん短くなっていくという変化、「教育の空洞化」現 の方ということ

るという状態になってきているわけです。 した。十八歳人口は、減少の一途を辿っている。進学率の伸びもた。十八歳人口は、減少の一途を辿っている。進学率の伸びもた。十八歳人口は、減少の一途を辿っている。 進学率の伸びもた。十八歳人口は、減少の一途を辿っている。 進学率の伸びもた。十八歳人口は、減少の一途を辿っている。 進学率の伸びもた。「学力不問」の学生募集難」に陥る大学が次々に出て参りました。「少子化」の進展によって、「学生募集難」に陥る大学が次々に出て参りました。

てきている。

できている。

に近付いているのではないかということです。マス化の時れてしまうという、学力の底が抜けてしまった状態に、だんだれてしまうという、学力の底が抜けてしまった状態に、だんだれてしまうという、学力の底が抜けてしまった状態に、だんだにはまだ、大学の収容力よりも進学希望者の方が多かったわけですから、学力の評価や選抜のメカニズムが働いていましたけですから、学力の評価や選抜のメカニズムが働いていましたが、今や学力評価や選抜のメカニズムそのものが働かなくなってきている。

る状態にあるのではないかと思います。サル化段階を迎えてしまった。二重にこの問題に悩まされてい日本の大学は、マス化への対応を怠っているうちに、ユニバー

#### 日本の大学教育の現状

五

といってもいいと思います。 政策というのは、伝統的な秩序を突き崩すために行われてきた 方がうと音を立てて崩れ始めている。この十年ほどの高等教育 ら、曲がりなりにも維持されてきたわけですが、それが今やガ ら、曲がりなりにも維持されてきたわけですが、それが今やガ といってもいいと思いますが、それはこの六十年間、揺らぎなが

学という組織の日本的な構造を厳しく規定してきたものでし問題です。設置基準は、日本の高等教育システム、あるいは大どこがどう変わってきたのか。一つは、「大学設置基準」の

た。 文部省は、 度重なる緩和によって、規定する力を失い始めた。 基本的な大学の仕組みや形を決めてきたわけです。それが今や しえなくなってきたということです。 い悪いはともかく、 大学の組織やシステムの秩序を維持する役割を果た 国が大学とはこういうものだという 国あるいは

そういう変化が起こっています。 認証評価制の出現は、パラレルの関係になっているわけです。 求するというふうな形になってきたわけで、設置基準の緩和と 方を縛っていくことは、 というのは、 ステムです。それで今、大学に「認証評価」を受けることを要 ク」に移行する。「事後チェック」とは何かというと、評価 「事前規制」から「事後チェック」へということです。「事前規制 それを象徴しているのが、この数年間文科省が言ってい 設置基準による規制です。設置基準で大学のあり もはやできない。だから「事後チェッ

うになってきています。つまり、学問の領域を、容易に限定で に進んで、「トランスディシプリン」という言葉も使われるよ きないような状況になってきている。 る「インターディシプリン」という言葉があります。今はさら プリン」といいます。ディシプリンとディシプリンの二つに跨 ているということがあります。「学問」は、英語では 二つ目は、 十九世紀的な学問体系が、いま大きく変わってき 「ディシ

教育が、どんどん分離をしてきているということでもあります。 ?な学問体系が崩れているということは、逆にいえば、 ]時に訓練、 ディシプリンというのは、ある学問分野を意味していますが 学部の名前を見れば、そこで何を教えているかが直 学問的な訓練をも意味していますから、十九世紀 研究と

> ちに判りました。工学とか、 いますが、 これらは典型的に十九世紀的な学問体系の枠組みで 医学、 法学とか、 一文字学部とい

という名前を見れば判りますが、「人間開発学」という学問そ ているというように変わってきているわけです。 が集まって、「人間開発学」という「教育のプログラム」を創っ のものがあるわけではない。さまざまなディシプリンの人たち それに対して、いま新しく発足した、 國學院の 人間開発学部

等学校での教育です。 これまで学部学生の質は、主に二つのもので担保されてきまし た。一つは、言うまでも無く、 それから三つ目は、「伝統的な学力維持装置の崩 入学試験です。もう一つは、高

いる。 科目も、 うそうではない。 うことで、 しているわけで、それとともに、 今や、高校教育はとっくにユニバーサル化どころか、「準義務化 キュラムで勉強していた時代は、 八科目型の授業が行われているわけですが、大多数の高校はも 化してきています。もちろん進学有名校では、 高校で生徒の大部分が、 英語や数学も細分化する、 本当に授業科目の内容と水準が多様化してしまって 選択科目制が中心で、 五教科八科目の標準化され 高校の教育課程も非常に多様 もう昔のことになりました。 グレードを分けていくとい 大幅に変わっている。 伝統的な五教科 たカリ

なっているわけで、 しています。ですから伝統的な、 高等学校からも、 高校の学力によるピラミッドを、下に行けば行くほどそう 大学のユニバーサル化とは、 進学希望者が大量にやってくることを意味 学力の維持の仕組みは、これ そうした下位

0

も崩れてしまっているということです。

すが、 ン・テクノロジーを使った新しい教育の仕組みが作られてい と先生の間で、 は、それに追いついていない。 それで育っている。 でも大半の私学には広がっているわけで、入学者選抜による学 生を入れる仕組みになってきています。定員割れの恐怖は、 付けること自体がナンセンスなのですが、これも学力不問で学 らアドミッション・オフィスがあるはずで、AOと入試を結び があります。アドミッション・オフィス入試、入試をしないか 学させている大学は、少なくありません。AO入試というも り広がってきています。 いるということがありまして、ここでもズレが大きくなってき んどん増えていますが、どうも大学の先生、あるいは大学の方 の若者たちは、もう情報化社会の申し子ですから、小学生の段 力の維持システムも、崩壊しつつあるといっていいと思います。 !からパソコンをいじり、 大学の現場では、もう一つ、 入学者選抜システムの方は、 日本の場合には、 アメリカではCIT、コンピュータ・インフォメーショ あるいは学生と大学の間でかなり大きくなって 情報機器を巧みに使いこなす若い世代がど 依然として講義中心の授業が行われて 定員を充足するために、学力不問で入 携帯もパソコン化しているわけで、 入学試験の有名無実化が、 情報化が急進展しています。 情報化社会のギャップは、 学生 かな 今 ま 今

様な職業に対して学生を向けて教育をしなければならない状況 それからもう一つ、大学と職業の関係も大幅に変わってきま どういう職業に就くのか将来の展望が判らない、 大学が職業に直結するような教育を行っている一 実に多

> ているわけで、その点でも伝統的な秩序は崩れているとい 関係を一・一対応で関連付けることが、殆ど不可能な時代になっ て、 なるものの中身を見て行きますと、 ければならないと思います。 の言葉を使っていることがわかります。 れています。私はあんまり好きではないのですが、その「学士力」 育の構築に向けて」答申の中で、「学士力」という言葉が使わ 何ができるかという、 ますます広がってきています。二〇〇八年の 一般的な能力を表現するために、 何を知っているかではなく 大学の教育と職業との 「学士課程 そ

ぞれの大学の中のコミュニティもありますが、それぞれがそれ を考えて、 なったのだと考えるべきではないかと思います。 あるべきだと示してくれる主体が存在しない、そういう時代に どこにもその秩序を構築してくれる、 くれる、と思われておりました。しかし、そうではない。 部科学省が作ってくれる、あるいは、 ばならない。これまでは、 は入りつつあるのではない いうのは、 いう中で、新しい秩序を何らかの形で、 るのだと思うのです。 要は我々がかつて棲んでいた世界とは違う世界に、 大学のコミュニティ、 創っていかなければならない、 その秩序は、 か。 伝統的な秩序が崩れているそう 大きなコミュニティ あるいはこういう秩序で 審議会が議論して決めて 我々は創り出さなけれ 国家といいますか、 という事態になって 新しい秩序と 文

#### 六 新しい秩序の構築へ

11

大学の教員の場合、 番重要な問題は恐らく、 研究重視

脱皮ということではないかと思います。

見型の研究というのが重要だと考えています。 が 系の学問では、 13 くというところに、インテグレーションに研 こい直してみる必要があると思います。 符されています。 あるとみるべきかもしれません。 大学の教員というのは複雑な職業で、さまざまな職業役割 そこでいわれている研究とは一体何なのかをもう一 発見ではなくて、むしろ新しい知識を統合して 教育だけでなくて研究も期 自然科学系の人は、 しかし人文社会 究の大きな意味 待されている訳 度 発 を

うのも、 で教育と研究は一体のものであるわけですが、大学の先生は基 と思います。 はないかと思います。 何も新しいものを発見するだけが研究ではない。そういう意味 -的には教員であるというのが、いま必要とされている認識 また、 これはどちらの系の学問でも重要な意味を持っている 知識をさまざまに応用していくアプリケーショ そういうものも研究の中に入っているわけです。

するところで成り立っているわけで、そういう意味で研 ていく知識を研究を通じて獲得をして、 )得るものだと思います。 **いあるというのは間違いないところだと思います。そういう意** 基本的な役割は、 離された教育は無いというのは確かです。しかし大学の教員 もちろん大学の教員は研究なしに成り立つ職業ではありませ 大学の先生が、高校以下の先生と違うのは、 教育と研究は両立しなけ まずは教育にある、 ればならないものですし、 それを学生たちに伝達 研究の多くはそのため 絶えず変化し 究と切 両立

もう一つ重要なのは、

カリキュラムの再構築の必要性です。

ませ

戦

後に

なって大学の

い規模

がマスプロ教育に移行しました。

学生たちのキャンパスライフ

ことは、これまでお話ししてきた通りです。 考えられてきました。 教育は本当に専門教育なのか、 組み直されなければならない。 論理ではなく、社会と学生の必要性に向けて、 を合体したもの、その集大成がカリキュラムだと、これまでは 先生方が、 かという問題でもあるのではないかと思います。 な学問体系を前提にして、 カリキュラムというのは、 自分たちの しかし、 専門領域 それぞれの学問領域の専門家である さきほど申しましたが、 もうそうではなくなったという 職業教育は本当に そこで問 の関連した科目を教える、 われているのは、 これからは学問 カリキュラムが 職業教育な 十九世紀的 専門

です。 段階 教育についての目標として挙げているアメリカの学者がいます に付けさせることが重要なんだ、ということを、 学長は「四つの 来た時は、 問題です。 が、これは日本の場合にもあてはまるのではないかと思います。 まり持続的に学習をする力。こういう四つのCを学生たちに身 ら三つ目はクリエイティヴィティ、 のかというと、 クリティカル・シンキング、 7 最後のもう一つは、 メリカ の教育の狙いは何か。 そして最後が、 戦前期に、 日 の例ばかり引いて恐縮ですが、 本の大学の最もいい時代だったと言えるかも知れ Č 一つはコミュニケーションの能力、 だと言っています。 コンティニュアス・ラーニングです。 大正七年の大学令によって大学予科が出 キャンパ いろいろな議論がありますが、 批判的に物事を見る能力、 スライフの が拡大した時に、 問題を自分で発見する能 「四つのC」とは何 アメリ 教育的な再編という 四年間の学部 カの 学部 それ 一目は、 ある 課程

見正は、日立つとこれの大きく変わりました。

うです。 もです。 ない。クラブ、サークル活動も、今は衰退の途上にあるよが、アメリカと比べて著しく少ない。学寮も日本の大学には存がスにいる時間が、先ほども就活とアルバイトの話をしました。何よりもキャンパスへの滞在時間が非常に短くキャンました。何よりもキャンパスライフは非常に貧しくなり

ければならないと思います。は世キュラム」としての意味を持っているからです。これは教育ではさまざまなものを学んでいくものです。学生たちの生活たちはさまざまなものを学んでいくものです。学生たちの生活がつくるもう一つのカリキュラムを、もっと重視する必要がある。正規のカリキュラムにも学生たちが、もっと関わりをもっていく、参加していく、そういう教育の場面をつくっていかなる。正規のカリキュラムにも学生たちが、もっと関わりをもったいく、参加していく、そういう教育の場面をつくっていかながつくる。正規のカリキュラムにも学生たちが、もっと関わりをもっている。という教育の場面をつくっていかながです。

く期待したいと思います。
を学部にも影響力を及ぼすようなものになっていくことを、強をの中で、新しいさまざまな試みがされて、それが他の伝統的要がある。人間開発学部というのは、新しい学部、新しい器です。

\*誌面の都合上、

みである。

本講演の音声記録は國學院大學人間開発学部・人間開発学口上、今回掲載したのは、講演の冒頭及び後半部分の要旨の

会が保有しており、

これとは別に

『國學院大學人間開発学部FDハン

ドブック1』として、本講演の全文を掲載した刊行物を作成している。